

『臨床医のためのインプラント治療原論——世界的標準治療の臨床戦略と判断基準』 古賀剛人・佐藤るり 共著

私事ではあるが、1978年に米国インディアナ大学歯学部補綴科大学院へ留学して間もなく、主任教授の故Dykema先生に「君は何を目的としてこのプログラムに参加するつもりなのか？」と尋ねられたことがあった。当時大卒3年目の私にしてみればアメリカの歯科補綴の先進技術を学んで自分のものにするこそが自分に課せられた使命と信じ込んでいた。「技術をマスターすることです」と返答した私に、先生は何の躊躇もなく、「診断力を身につけるのが目的だよ」と、軽く私を諭して、その場を立ち去って行かれたことをいまでも明確に覚えている。以後、その時の感動を頭の隅に置きながら、歯科の勉強を続けてきた。

デンタルダイヤモンド社の牧野社長から本書の書評を依頼され、早速通読してみて、「診断の大切さ」を切々と訴えていることに最初に感銘を受けた。後日、本書の精読を始めてさらに気づいたのは、インプラント治療が欠損補綴の万能薬でないことを提示した後、その難しさと課題を克服するのに不可欠な科学的根拠と現時点でのコンセンサスを世界基準で正確に提示していることであった。著者らの経験の深さ、問題意識の強さ、及び真摯な勉強の姿勢に感心した。オッセオインテグレーションの概念に基づくインプラント治療を長年継続していくと誰もが多くの問題に悩むようになる。その最たるものが感染と外傷による失敗である。私の症例でも術後10年以上してから多発してくるペリインプランタイトイスの対処に追われることが多い。また、バイオメカニクスの不備による外傷や負担過重が理由で補綴物が壊れたり、インプラント体が喪失する症例も時々経験する。これらの問題にいかに対処すべきかは、治

療結果の耐久性が問われるインプラント補綴の臨床では極めて重要であろう。

本書は膨大な文献検索をもとに、診査、診断、治療計画、治療に関する極めて多くの指針を示してくれている。オッセオインテグレーションに対する正しい考

え方、術前・術中・術後の感染への対処、外傷による失敗の回避策、新しい術式や材料に対する考え方の根拠、起きてしまったトラブルへの対応など、私だけでなく、インプラント治療を実践している大多数の臨床医が知りたかったことを、わかりやすくまとめてくれている。これほどまでしっかりとした裏付けを示しながら臨床の課題に取り組んだインプラント関連の著書にこれまで巡り合ったことはない。技術偏重または症例報告の羅列が多い昨今の情報のなかにあって、本書は「原論」と書名に謳われているごとく、本当の意味で臨床医に役立つ格好のガイドブックの黎明となるであろう。正しいインプラント治療に関する共通認識を確立するための書の出現に賛辞を贈るとともに、本書が広く活用されんことを切望する。

文・岩田健男（医療法人社団 健歯会 東小金井歯科／デンタルヘルス・アソシエート代表）



デンタルダイヤモンド社・A4判148頁・オールカラー
定価（本体 12,000円＋税）